

目隠し姫と鉄仮面 2

セシリア・
リエナ・スノーエイラ▶

辺境領スノーエイラの
領主夫人。ハーシェル
の妹で、
ロベルトとは幼馴染。今回、
嫁ぎ先から里帰りしてきたが……

▲ノルマン&レティシア

フィオナの両親。
娘達を優しく見守っている。

▲ハーシェル・
クレスシェン・
ウォルトホル

街の警備団団長。
アイシスの婚約者で、
ロベルトとは乳兄弟。

アイシス・トレース▲

フィオナの妹。明るく勝負な
美少女で、かなりのシスコン。

▲ロベルト・アスレイル

24歳。街の警備団副団長で
フィオナの婚約者。
「鉄仮面」と呼ばれるほどの
仏頂面だが、とても心優しい青年。

▲フィオナ・トレース

18歳。前髪で顔を隠して
引きこもり、「目隠し姫」と
呼ばれていた。
今はロベルトと婚約し、
幸せに過ごしている。

目次

目隠し姫と鉄仮面2	7
序章	8
一章 セシリア姫の来訪	12
二章 お茶会	55
三章 種明かし	81
四章 襲撃	113
五章 本当の理由	142
番外編 春に笑うは一つの花	201

目隠し姫と鉄仮面 2

序章

その日、ウォルトホル領の若き領主シエディールは、領主館の客室にいた。彼は短い金髪を綺麗に整え、シンプルだが上質な衣服を着て客人と対面している。そして、その青い目で相手に微笑みかけた。

西の辺境領スノーエイラに嫁いだ妹が、数年ぶりに帰郷したのだ。整った容貌のために冷たく見えやすいシエディールだが、家族にはめつぽう甘い。

妹が帰郷したのは自分の結婚祝いのためなので、尚更浮き立っている。事情があって結婚式に参列できなかった妹が、このような形で祝福の気持ちを示してくれたことを彼は嬉しく思っていた。

その妹——セシリア・リエナ・スノーエイラは、今しがたシエディールから告げられた話に甲高かんだかい声を上げた。

「ハーシエルお兄様が婚約……!? それ本当ですよ、シエディールお兄様！」

セシリアは薄紫色のドレスに身を包み、金髪を複雑に結び上げている。口元こそ白い扇子せんすで隠しているが、兄と同じ青い目は驚きに見開かれていた。

「本当だよ、セシリー。ついこの間のことだ」

シエディールは、セシリアと似た顔に愉快そうな笑みを浮かべて頷く。

「結婚よりも自由と公言してはばからなかった、あのお兄様ですわよね？」

次兄のハーシエルが恋愛至上主義であることを、セシリアはよく知っている。疑いをたっぷり込めて聞き直したが、やはりシエディールに頷かれた。

しばし哑然あはだとした後、驚きをどうにか収めたセシリアは、次なる疑問を口にする。

「お相手の方は、どちらのご令嬢ですか？」

「いや、貴族ではなく平民だね。トレース商会の末娘で、名はアイシス・トレースという」

「……商家の娘、ですか？」

セシリアは眉をひそめた。

「そんな顔をするな。ハーシエルは次男だからな。貴族の娘婿むすめむすになるか、子どもがいない貴族の養子になるか、独立するかだが……私に何かあった時のことを考えると、この領地にくれた方が助かる。だから相手が商家の娘だろうが、領内で落ち着いてくれるのなら、私は特に気にしないよ」

シエディールは至って平然と言い、紅茶を一口飲む。

貴族の次男というのは複雑な立場だ。長男が領主になれば家から追い出されるが、長男が子どものないまま死んだ場合、代わりに跡を継ぐことになる。

「それから、もう一つ嬉しい報告があるんだよ。なんと、ロベルトも婚約したんだ。そのアイシス嬢の姉とね。そちらはフィオナ・トレースという名だ」

「……あのロベルトですわよね？ 鉄仮面の。それとも、同じ名前の別の方ですか？」

ハーシエルの時と同じように疑うセシリアを見て、シエディールはくすりと笑った。

「信じられないのも分かるが、あのロベルトだ。ハーシエルの乳兄弟のね」

シエディールの言葉でようやく納得したセシリアは、喜びに顔を輝かせる。

「あの無愛想の権化に、とうとう春が訪れましたのね！ なんておめでたいのかしら！」

ロベルトはかつて領主家の使用人であり、また彼の母親が兄ハーシエルの乳母を務めていたことから、セシリアをはじめとする領主家の面々とも親しくしていた。真面目で優しい青年だがあまりに無愛想なので、結婚相手が見つかるのだろうかとセシリアは心配していたのだ。

シエディールはしきりに頷きながら、感慨深げに言う。

「本当に良かったよ、実に幸せそうだね。三ヶ月ほど前にハンナが亡くなったから、心配していたんだが……」

「ハンナが……？ 嘘でしょう？」

セシリアはロベルトの母であるハンナとも親しかったから、思いがけない訃報にショックを受けた。

わななくセシリアに、シエディールは慌てて謝る。

「ああ、すまない。もつと心構えをさせてから話すべきだった」

そう言った後、彼はセシリアが何かを決意したような顔をしているのに気付き、困惑しながら呼びかけた。

「……セシリー？」

すると、彼女はたった今決めた予定を兄に告げる。

「お兄様、わたくし明日、警備団に参りますわね」

「ん？ ああ。君と会うのは久しぶりだから、ハーシエルも喜ぶだろうね」

「ハーシエルお兄様のことなんかどうでもいいですわ。わたくしが用があるのはロベルトです」

そう言うと、セシリアは青い目を爛々と輝かせて宣言した。

「今度こそ、ロベルトをわたくしのモノにしてみせますわ！」

そんな妹に、シエディールは苦笑する。

「またか？ ハーシエルと喧嘩しないようにね。それから、ロベルトを苛めないこと」

「苛めたことなんかありませんわ。あれは修業です」

無然としてそう言い張るセシリア。

「そうなのか……？」

シエディールは苦笑したまま、かすかに首を傾げた。

「そうしてお姫様と王子様は、末永く幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし」

それぞれ男女の人形を手にした二人の人形使いがお辞儀をすると、わっと歓声上がり、拍手の音が広場に響き渡った。

観客席に座って人形劇を鑑賞していた十八歳の少女——フィオナ・トレーズも、パチパチと両手を叩く。魔女にさらわれたお姫様を王子様が助けに行くというありふれた話だったが、十分に楽しめた。

観客は子どもが多いが、大人の姿もかなり見受けられる。街に興行師がやって来ることなどそうそうないので、物珍しさからだろう。

ましてや家に引きこもりがちなフィオナにとつては、とても新鮮だった。

紺のワンピースの上に灰色の外套を着て白いマフラーを巻いたフィオナは、腰まである黒髪を揺らして、左隣に座る青年を見る。そして玻璃のような青い目を輝かせて話しかけた。

「面白かったですね、ロベルトさん」

「ああ、そうだな。フィオナ殿」

そう言つて、青年——ロベルト・アスレイルは、髪の毛と同じ黒い目を穏やかに細めた。

彼は背が高く、精悍な顔立ちをした二十四歳の若者だ。軍人のように姿勢の良い彼は、このメリーハドソンの街を守る警備団の副団長を務めている。

フィオナは彼に同意してもらえたという、ただそれだけのことが嬉しく、笑みを深めた。

一ヶ月ほど前にロベルトと婚約してから、フィオナは前よりもずっと外に出るようになった。

幼い頃に継母レイシアから「顔を見せるな」と言われて以来、彼女は前髪を伸ばして顔を隠していた。そのせいで街の人から「目隠し姫」とからかわれ、人前に出るのが怖くなってしまったのだ。

前髪はお見合い相手にハサミで切られてしまった。だがロベルトのおかげでレイシアと和解し、長年抱えていた不安が解消されたため、フィオナは人前に顔を出せるようになった。

その後、件のお見合い相手に誘拐されてしまった時も、ロベルトが助けに来てくれた。そんな彼と婚約し、今は幸せな毎日を送っている。

今日は久しぶりのデート。旅の人形師が興行に訪れているから見に行こうと、ロベルトが誘ってくれたのだ。

ついで、にやけてしまいそうになる顔を引き締めていると、冷たい風が頬をなでていった。

寒さに首をすくめたフィオナは、澄んだ青空を見上げる。もうすぐ冬將軍がやってくるなあ、などどのんびり考えていたら、急に首回りがかもこしたもので包まれた。フィオナは青い目を瞬か

せ、ロベルトを見た。



彼は真剣な顔をして、さっきまで自分が着けていたマフラーをフィオナに巻き付けている。

「あの、私、自分のがあるのですが……」

「でも寒いのだろうか？」

マフラーを巻き終えると、ロベルトは満足げに頷いた。

その顔がおかしくて、フィオナは噴き出してしまふ。彼の生真面目な性格は、出会った当初から全く変わらない。

フィオナがロベルトと出会ったのは、今年の夏だった。彼はあまりに無愛想なので、街の人々から「鉄仮面」と呼ばれている。自身も「目隠し姫」とあだ名されていたフィオナは、勝手に親近感を抱いた。

ロベルトの無愛想ふりは、警備団員として犯罪者を取り締まるのには役立つているようだ。ただ、何もしていないのに子どもに泣かれたり、鳥や犬にまで逃げられたりするので、本人は気にしている。

だが、フィオナと付き合い始めてからは少しずつ顔に感情が表れるようになり、その怖さが和らいできたらしい。特にフィオナという時は、だいぶ穏やかな表情をするようになってる。それがフィオナには嬉しく、こそばゆい気持ちになるのだった。

「フィオナ殿、体調は悪くないか？ 外で人形劇を観るには、少し寒すぎただろうか……」

ロベルトは心配そうに問いかけてきた。

すでに初冬だが、きちんと着込んでさえいれば、さほど寒くはない。ただフィオナがもともと病

弱なので、ロベルトは心配してくれているのだ。少々過保護に思えるが、三ヶ月前に母親を病気で亡くしたせいもあるのだろう。

マフラーを二重に巻いているせいで身動きしづらく、少し困ったなあと思いつつも、フィオナは笑顔で答えた。

「大丈夫ですよ、私は元気です。だって久しぶりのデートですから」

ロベルトは警備団の仕事が忙しく、あまり休みが取れない。今日はたまたま時間が少し空いたので、誘ってくれたのだ。

「そうか。それが薬になるのなら、俺も嬉しいよ」

ロベルトは照れたような笑みをかすかに浮かべ、フィオナの手をとって立ち上がった。

「劇も終わつたし、食堂に行こう」

「はい」

この後は、一緒に昼食をとる約束だ。

ロベルトは人形師達の帽子に小銭を入れた。

「ありがとう。お幸せに、お二人とも！」

人形師達がそう言つて笑顔で手を振つたので、二人は照れ笑いしながら通りを歩き出した。

*

「あ、フィオナさんだ。お久しぶりです！」

食堂に入ると、フィオナ達は横合いから声をかけられた。

そちらを見ると、赤い髪と青い目をしたやんちゃそうな少年が、人懐っこい笑みを浮かべて椅子から腰を上げた。ロベルトの部下であるハンスだった。

ここ風見鶏亭は、メリーハドソンの街ではおいしいと評判の食堂だ。警備団の本舎の前にあるため、団員がよく利用している。

「ハンスさん、お久しぶりです。レネさんに、ゲイクさんも」

フィオナがそう言うと、ハンスの向かいに座る先輩団員二人——レネとゲイクも、それぞれ立ち上がって挨拶した。

レネは茶色い髪をポニーテールにしている、凛々しい雰囲気を持った二十代の女性団員だ。フィオナとも親しい間柄で、フィオナがロベルトに用があつて警備団本舎を訪れた時、時間が合えば一緒にお茶をしている。

一方のゲイクは茶色の髪を短く切り揃えた男性団員で、がたいがよく、身長もロベルトと並ぶほど高い。紺色の目を細めて笑いかける彼は、いかつい見た目とは裏腹に、親しみやすい青年である。年齢が近いこともあり、部下の中で最もロベルトと親しい。

副団長とその婚約者を前にしてかしまつた態度を取る部下三人を、ロベルトは右手で制した。

「休憩中だろう、気にしなくていい」

「ええー、副団長とフィオナさんに、きちんと挨拶しないなんて失礼な真似は出来ませんよ。ここ

るで、お二人はデートですか？ 今日のフィオナさん、とってもお洒落しゃれですね！ でも、その……」
ハンスはフィオナの服装を褒めた後、その首元に目を留めて、言葉を濁にごらせた。

するとハンスに代わり、レネが言う。

「フィオナ、そのマフラーはどうしたんだい？ ずいぶん動きにくそうだけど」

「ええと、さっきまで広場で人形劇を見ていて……ロベルトさんが寒いだらうって」

「うわ、副団長、顔に似合わず過保護！」

「うるさいぞ、レネ。それに顔のことは余計だ」

笑い出すレネをロベルトはじろりと睨にらむ。

フィオナは顔を赤くして縮こまった。

レネの隣の席では、ゲイクが岩のような体を揺らして笑っている。

「幸せそうで何よりですよ、ロベルトさん。フィオナ嬢、ありがとうな。この人えらく無愛想だったけど、あんたと付き合い出して、だいぶマシンになったからね。ま、フィオナ嬢の方も、前よりずつといい顔してるけど」

「そ、そうですか……？」

周りからは明るくなったと言われるが、フィオナ自身はよく分からない。だがなんとなく恥ちずかしくて、ますます身を縮めた。

「はいはい、そこまで！ せっかくのデートなのに邪魔しちゃ悪いよ。では副団長、また後で。フィオナも、たまには警備団においでよ。また女同士、仲良く茶でも飲もう」

レネがそう言ってフィオナに笑いかけると、ハンスが口を挟む。

「先輩、お茶とか言って、フィオナさんの手作りお菓子が食べたいだけじゃないんですか？」

「それはお前だろうが、ハンス！」

ゲイクがすかさず突っ込んだので、場に笑いが起こった。

フィオナもくすくすと笑いながら、呆れ顔のロベルトに促うながされて窓際の席に向かうのだった。

*

「あ、お帰りなさい副団長。伝令が届いていますよ」

フィオナを家まで送った後、機嫌良く警備団の本舎に戻ったロベルトは、ハンスから報告を受けた。それはまさに天国から地獄へ叩き落とされるような内容で、ロベルトは衝撃のあまり、受け取った書類をバサバサと床に落としてしまった。

「セシリアお嬢様が、こちらにいらっしやる……？」

手渡したばかりの書類をばらまかれたハンスは、青い目を丸くして床を見る。

「うわ、副団長、何をなさるんですか!? さつき分類したばかりなのに！」

ハンスはロベルトの執務室付の団員だ。まだ入団して一年も経っていないが、仕事ぶりは良い。団長でなければ決裁できない書類と、副団長以下の団員で処理できる書類を仕分けするのは彼の仕事の一つだが、結構時間がかかる。それを床にぶちまけられたのだから、文句を言いたくなるのも

当然だ。

ハンスはしゃがみ込み、急いで書類を拾い集めた。それらを元通りに並び替え、ロベルトに向き直ったところで、ようやく彼の様子がおかしいことに気付く。

「副団長、どうされたんです？ お顔が真っ青ですよ」

だが、ロベルトはその問いには答えず、うわごとのように呟いた。

「セシリアお嬢様が……」

棒立ちのまま、虚空を見つめてぶつぶつと言っている様は不気味だった。

ハンスは、恐る恐るロベルトの顔を覗き込む。

すると、ロベルトは急に頭を上げた。

驚いたハンスは、後ろに飛びのく。

「わっ、何なんですか急に!？」

「ハンス、俺は逃げる。——いや、体調が悪いので早退する」

「は？ 今逃げるって……。それに、さっきまで元気だったじゃないですか」

「早退だ。俺は病気なんだ。——い、い、な？」

最近ハンスはマシになったとはいえ、ロベルトは「鉄仮面」とあだ名されるほどの強面だ。威圧されたハンスは、思わず首を縦に振った。本能的に、逆らってはいけないと感じたのだ。

それを見たロベルトは一つ頷くと、黒い鞆を手に扉へ向かった。

「俺は、しばらく休暇を取って街を離れる」

「へ？ 街を離れ……？」

訳が分からず混乱するハンスに、ロベルトはきっぱりと告げる。

「後のことは任せたぞ、ではな」

「は、はい。了解しました」

執務室を飛び出していくロベルトの背中を見送ったハンスは、不思議そうに呟いた。

「セシリア様がおいでになるといっただけで、どうしてそこまで……？」

答えをくれる人はすでになく、その声は執務室に虚しく響くだけだった。

領主シエデールの妹セシリアが警備団を訪問するという知らせがあったのは、今日の午前中のことだった。

ハンスがそれを伝えた途端、どういうわけか我々が副団長は逃亡をはかってしまった。

(副団長は四年前まで領主家に仕えていたので、セシリア様とも懇意にされていたはずでは?)

彼は間違いなく何かに怯えていた。メリーハドソンの剣の使い手であり、危険な現場でも常に冷静なロベルトを怯えさせるものとはなんなのだろう。

ハンスは怪訝に思いながら、茶菓子を待つて部屋中央にあるテーブルに近づいた。

そのテーブルを挟むように置かれた青いビロード張りの長椅子には、ハーシエルとセシリアが向かい合って座っている。

セシリアはハーシエルの妹だけあって、美形で有名だ。

出るところは出て、引つ込むところは引つ込んだ、女性らしい魅力的な体。蜂蜜色の見事な金髪を複雑に結び上げており、青い瞳が麗しい。藤色のドレスがよく似合う立派な貴婦人だ。

「お兄様、ロベルトはどうしましたの？」

セシリアの白い扇子で隠された口元から、涼やかな声が聞こえた。さほど大きくはなかったが、よく通る声だった。

「ロベルトなら早退したよ。ねえ、ハンス？」

「はい。体調不良だそうです」

「——というのは建前で、要するに逃げたんだよね」

ハーシエルはしれつと言った後、我慢しようとして耐え切れなかったようで、小さく嘖き出した。セシリアは、むっとして眉を吊り上げる。

そんな彼女の後ろでは、侍女や女性騎士が気まずそうに視線を泳がせていた。

ハンスもどういふ顔をしていいか分からず、必死に無表情を取り繕う。だが今では、ロベルトが逃げ出した理由を何となく察していた。

というのも、一見、優美な貴婦人であるセシリアが、レイピアと、いくつものスローイングナイフが収まったベルトを装着しているのを見たからだ。

これはいったい何の冗談なのかと思ったが、ふと、この妹姫にまつわる噂を思い出した。

セシリアは五年前、十六歳でスノーエイラ領主に嫁いだ。当時十一歳だったハンスはあまり興味

がなかったが、祖父がよく近所の友人と話していたのだ。

数々の武勇伝と、「盗賊潰し」や「ヴォルトホル領随一の女傑」など穏やかでないあだ名を持つ彼女について。

「まったく、ロベルトときたら……！ 久しぶりに会うというのに、逃げるだなんて！」

——バキッ！

セシリアが白くたおやかな手で扇子をへし折ったのを見て、ハンスは自分の目を疑った。

しかし周りは、特に動じた様子はない。セシリアの侍女は慣れた様子で新しい扇子を彼女に渡し、床に落ちた扇子を素早く回収している。

「あははははは、相変わらず怖がられてるね、セシリー」

ハーシエルは大きな声を上げて笑いながら、妹を愛称で呼んだ。

大笑いしすぎて目尻に涙まで浮かべる兄に、セシリアはますます憤る。

「お兄様つたら！ でも、今回ばかりは逃がさなくてよ！ わたくしがここに来たのは、ロベルトに会うのが目的ですもの」

「うん、そうだろうと思った。ところで、兄上からハンナのことは聞いたかい？」

ハーシエルが静かな口調で問うと、セシリアは小さく頷いた。

「まさかハンナが亡くなっていたなんて……。悲しいですわ。ハンナはお兄様だけでなく、わたくしの面倒もよく見てくれましたもの」

ロベルトの母親であるハンナは、ロベルトを妊娠中に夫を事故で失った。乳飲み子を抱えて困っ

ていた彼女を、領主家がハーシエルの乳母として雇ったのである。

「ハンナのことは残念だよ……。でも病氣療養のために彼女が仕事を辞めた時から、僕は覚悟していた」

執務机の上で手を組み、ハーシエルはしんみりと呟いた。だが、場の空気が重くなってしまったことに気付くと咳払いをし、組んだ手に顎を載せて青い目を細めた。

その目が若干の冷たさを帯びていることに気付いたハンスは、思わず身をすくめる。

「それでセシリー、彼に何の用？ 昔さんざん苛めておいて、まだ足りないの？」

そう問う姿からは、警備団長としての顔と、妹をたしなめる兄としての顔、その両方が窺えた。

セシリアは、不愉快そうに眉を寄せる。

「苛めてなどいませんわ。あれは修業です。熊狩りへ行かせたのも、川に飛び込ませたのも、すべて修業でしたのよ。シエディールお兄様といい、ハーシエルお兄様といい、失礼ですわね。ロベルトもロベルトですわ。しごかれるのが嫌ならば、最初からそう言えば良かったのです」

ハーシエルは、やれやれというように溜息を吐いた。

「物は言いようだね、まったく。あれが修業？ 僕には苛めにしか見えなかったけどな。だいたい使用人だったロベルトが、君に命令されて断れるわけがないだろう？ そのせいですっかり無表情になっちゃって。性格が歪まなかったのが不思議だよ」

そう言われても、セシリアは不満顔だ。どうやら認めたくないらしい。

「それで、セシリー。用件は？」

ハーシエルは再度問いかけた。口調は穏やかだったが、厳しい目でセシリアを見ている。

さすがの彼女でも怖いのだろう、セシリアは背筋を伸ばす。

ハンスなど、凍り付いてしまつて身動き出来ないくらいだ。

「ハンナが亡くなり、ロベルトに枷はなくなりました。どこに行こうが自由でしょう。ですから、彼をスノーエイラに連れて帰ろうと思います」

「……なるほど。まあ、訊いてみれば？ たぶん断られると思うけどね」

ハーシエルがにべもなく言うのと、セシリアは目をぎらりと光らせた。

「あの剣の腕は、わたくしの旦那様の領地のような、揉め事の絶えない場所だからこそ必要ですわ。絶対に連れて帰ります！」

強気に言い放つセシリアに、ハーシエルは笑みを返す。

だが、どういうわけか部屋の気温が下がった気がして、ハンスはぶるりと震えた。誰か代わってくれと、この場にはいない同僚達に心の中で助けを求めた。

次いでハーシエルは、妹の計画をあつさり否定した。

「無理だと思うよ。だって彼、この街の女性と婚約したからね」

「そのお話、シエディールお兄様からお聞きしましたわ」

些末なことというふうには、セシリアは扇子で軽く扇ぎながら言う。

「どうせ、大した娘ではないのでしょうか？ それに、あの無愛想では、すぐ振られてお仕舞いに決まつてましてよ」

「それが、かなりの美人なんだよね。大変な恥ずかしがり屋で対人恐怖症なのに、ロベルトのことは怖がらないんだよ。面白いだろう？」

ハーシエルが楽しげに語るのを聞き、セシリアは思い出したという様子で身を乗り出した。

「そういえば、お兄様も平民と婚約したと聞きました。本当なのですか？ しかも、ロベルトの婚約者の妹とか」

「ああ、その通りだよ。アイシス・トレーズ嬢というんだ。とても可愛らしくて、元気で明るい良い娘だよ。そうそう。この間のデートの時なんて……」

ここぞとばかりに始まったハーシエルののろけ話を、セシリアはテーブルを叩くことのでぶった切った。

「そんな浮わついた話、聞きたくありませんわ！ わたくしは、その婚約には大反対ですよ！」

「ええ、どうして？ 兄上は喜んでくれたのになあ」

ハーシエルはセシリアの怒りを飄々と受け流し、不思議そうな顔をした。

セシリアは長椅子に深く座り直して答える。

「わたくし、自分をわきまえることは大切だと思っていますの。昔から、身分違いの恋は悲劇を生むものです。お兄様、あなたは貴族の生まれですし、男ですからまだよろしいですわ。ですが、もしお兄様の気持ち離れた時、その娘に待っているのは辛い現実ですよ。血の繋がった兄のせいであつちていく花など、見たくありませんわ」

口調は冷たいが、セシリアは平民であるアイシスを気遣っているようだった。

ハンスはその言葉を聞き、気性が激しいだけのお姫様ではないのだなと感心する。

セシリアの侍女も、彼女に同意するように頷いていた。

「そんな心配は無用だよ、セシリー。僕には生涯アイシス嬢だけだつて確信しているからね」

ハーシエルは真剣な顔で、歯の浮くような台詞を口にした。

だがセシリアにはふざけているように聞こえたらしく、再び眉を吊り上げる。

「ハーシエルお兄様の『絶対の愛』なんて、全く信用できませんわ！ 子どもの頃から、女性を見ればふわふわフラフラしていましたもの。そういう殿方が、妻の妊娠中に浮気したりするんですわ！」

女性特有の鋭い切り口でもって、セシリアはハーシエルの言葉を全否定した。

「今すぐ別れた方が、その娘のためです！」

とどめを刺され、さしものハーシエルも顔を強張らせた。

「僕は浮気なんかしない。彼女のことは本気なんだ。セシリー、君は僕のことをどれだけ知っているっていうんだい？ 臆測でそこまで言い切るのはやめてくれないか」

ハーシエルの声には、静かな怒りが満ちていた。

ハンスは青ざめ、逃亡したいあまりにちらちらと扉を見てしまう。

視界に入ったセシリアの侍女も、同様に青い顔をしていた。

しかしセシリアはつんと顎を上げ、ハーシエルを真っ向から睨み返している。

それでもハーシエルは淡々と続けた。

「それにね、君の許可なんか必要ないよ、セシリー。僕は自分の選んだ人をお嫁さんにするからね。せつかく次男という気楽な立場に生まれたんだから、好きに生きるって決めているんだ」

「そういう軽薄な態度が、領主家の品位を落とすんですわ！」

「人の心配をしている暇があったら、嫁ぎ先に帰って君の愛する旦那の補佐をしていなさい」

「余計なお世話です！ とにかく、ロベルトは絶対に連れ帰りますから！」

ハーシエルとセシリアは、無言で睨み合った。

ハンスは、頼むから帰らせて下さいと心の中で懇願する。

やがて、セシリアは右斜め後ろに立つ女性騎士をキッと振り返った。

「エルネ！ 部下達に命じて、ロベルトを探し出すのです！ わたくしも出ます！」

「はっ、セシリア様！」

女性騎士は、両足を揃えて右の拳を左胸に当てると、即座に執務室を出て行く。

（何だ、この軍隊みたいなノリ……）

ハンスは静かに閉まる扉を唸然と見つめる。その後ふとハーシエルに視線を戻し、息を呑んだ。

彼は、ものすごく剣呑な目つきで女性騎士の出で行った扉を見ていたのだ。

ハーシエルはセシリアに向かって呆れたように言う。

「いつだって君は力ずくだよね。僕はそういうスマートじゃないやり方は嫌いだよ」

するとセシリアは扇子で口元を隠し、ドレスの裾を揺らして席を立った。そして横目でちらりと兄を見る。

「わたくし、お兄様のように気が長くありませんの。では、失礼」

そう言って、侍女とともに退室した。

彼女が立ち去った室内は、しんと静まり返る。

（うっわ、気まずっ）

ハンスは部屋の隅で直立不動のまま、この気まずさをどうしようかと思っていた。常に飄々としていたハーシエルが、今は見たことがないような冷たい目をしている。まるで別人だ。

やがてハンスが困惑しているのに気付いたのか、ハーシエルが表情を緩めて苦笑した。

「ああ、妹とは仲が悪いわけじゃないんだよ？ ちょっと意見が合わないだけなんだ」

「はあ……」

「妹は、あの通り気が強くってねえ。それに加えて男勝りに武芸も好むし、政治への関心も強いんだ」

「すごいですね。貴族のお嬢様というのは、そういうもののですか？」

ハンスが恐る恐る問うと、ハーシエルは目を丸くした後、笑い出した。

「そんな、まさか！ あれは稀少な例だよ。安心して夢を見ていなさい。——あ、でもさっきので壊れてたらすまないね」

ハーシエルは、謝りながらも楽しそうに言う。だがすぐに笑みを消して顎に手を当て、苦い顔をした。

「セシリーはね、スノーエイラ領に嫁いだんだよ」

「スノーエイラというと、西にある小さな領地ですか？ 周辺の領地とのいざこざが絶えず、盗賊なども多いという……」

ハンスが噂を思い出して尋ねると、ハーシエルは頷いた。

「そう。小さな領地の割に、土地が豊かなものだからね。加えて隣接するうちの一つが敵国の領地だし、周囲は他も貧しい領地ばかりなんだ。妹はあの通りの性格だろう？ 正直、あんな血の気が多い娘を嫁にくれという物好きはいないだろうと、僕も兄上も思っていたんだ。けど、スノーエイラの領主が是非うちに来てくれて言ってるね。セシリーは嬉々として嫁いでいったよ」

「そうなんです……」

ハンスは、領主家にまつわる新事実を知って、諦めたように呟いた。

警備団に入ってからというもの、ハーシエルをはじめ領主家の人達は変わっているのではないかと疑っていた。きつと気のせいだと自分に言い聞かせてきたけれど、そろそろ無理がある。

「ちなみに、話を聞いてて分かったと思うけど、ロベルトが『鉄仮面』になっちゃった原因は妹だよ。君はロベルトに付いてるんだから、よく覚えておいて。逃亡の手助けもしてやってね」

「え、よろしいんですか？」

「うん。うちの妹もいい加減、思い通りにならないこともあるって知るべきだからね」

ハーシエルから輝くような笑みを向けられ、ハンスは思わずぶるつと震えた。そして、やはり本当は兄弟仲が悪いのではないかと思うのだった。

*

——お姫様は、騎士が守ってくれるんだって。だからロベルトは騎士になって、お兄様達と私を守ってね。

ロベルトが八歳の頃、童話を読み終えたセシリアが、可愛らしく微笑みながらそう言った。

自分のことだけでなく兄達のことを守るように言ったので、ハーシエルも隣で嬉しそうに笑っていた。その頃のセシリアはハーシエルにべったりだった。だから彼もそんな妹を可愛がり、面倒をよく見ていたのだ。

ロベルトもまた、思いやり溢れるセシリアの言葉に笑みを浮かべていた。昔から表情が乏しかった彼だが、当時はまだそれなりに感情を表現できていたのだ。

お姫様の可愛らしい頼みに「もちろんです」と答え、ロベルトは剣の訓練に身を入れた。

——ロベルト、あの童話の騎士みたいに強くならなくては駄目よ。弱虫なんかいらぬの。だから修業よ、修業！

ロベルトが十一歳になる頃、セシリアはお姫様ではなく騎士に憧れるようになった。何と、ロベルトを叱咤激励するようになったのだ。

ロベルトは、その期待に応えようと頑張った。子どもながらにハーシエルの従者として、領主家の人々を守りたいと思っていたからだ。

やがて、何かおかしいような気がしてきた。セシリアは、次第に無理難題を課してくる。それでもロベルトは、強くないと屋敷を追い出されるかもしれないという不安もあり、黙々と従っていた。

だが時に死ぬような目に遭わされているうちに、セシリアのことを「可愛らしいお嬢様」でなく「恐ろしいお嬢様」と思うようになったロベルトは、彼女から逃げ回り始めた。

そのような日々の中で、ロベルトの顔からは表情がどんどん失われ、ついには街の人々から「鉄仮面」とあだ名されるまでになったのである。

封印したい過去を思い出して青ざめながら自宅に戻ったロベルトは、まっすぐクローゼットに向かった。

両開きの扉を勢いよく開け、セシリアからいつでも逃げられるようにと常備している鞆を取り出す。彼女が遠い地に嫁いでも、油断しなかった自分を褒めたい。

ロベルトは黒い外套を羽織り、鞆を背負って家を出ようとした。

その時、ふと思いついて庭へ行く。

そこで飼っている鳩を一羽、小さな鳥籠に入れて携えると、今度こそ家を出た。

*

「あとちよつとで完成ね」

ロベルトが逃亡の支度を整えている頃、フィオナは自室で趣味の裁縫をしていた。

青色のリボンに、白い糸で花を刺繍していく。妹のアイシスのために作っているハンドバッグに、飾りとしてつける予定のものだ。

「次はいつお会い出来るかしら」

機嫌良くさくさくと縫いながら、フィオナは口元に笑みを浮かべて呟いた。今度はもつと長く一緒に過ごせたらいいと思うが、外は寒いので、長時間出歩くのは無理そうだ。

(いつそのこと、夕食にお招きしようかしら)

特に父ノルマンは、フィオナがロベルトと交際していることを喜んでいる。笑顔で迎え入れるのではないだろうか。

楽しい計画を頭の中で立てていると、ふいにカシャンという音がした。

「……？」

驚いてパツと顔を上げたフィオナは、目の前の窓ガラスに小さな石が当たるのを見た。

立ち上がって窓の下を見れば、家の前の通りにロベルトが立っていた。彼は一生懸命トレーズ家の裏庭を指し示している。

「どうなさったのかしら」

なにやら周囲を気にしている様子から、ただ事ではない気配がする。フィオナは針を針山に刺し

てリボンを机に置くと、すぐに裏庭へ向かった。

「ロベルトさん？ いったいどうし……」

フィオナが声をかけると、彼は「しーっ」と言いながら口元に人差し指を立てた。パツと両手で口を覆ったフィオナは、しきりに辺りを警戒しているロベルトを怪訝に思いつつ、小走りに駆け寄った。

そして、今度は小さな声で問う。

「どうしたんですか？ 表から訪ねて下さればいいのに。お茶をお出ししますから、中へどうぞ」

「申し訳ない、フィオナ殿。その誘いには心惹かれるが、今は時間がない。可及的速やかに用事を済まさねばならんだ」

真面目な顔で意味不明なことを口にし、ロベルトは手にしていた鳥籠をフィオナに渡した。

つい受け取ってしまったフィオナは、きよんととして籠の中の鳩を見る。

すると、鳩はくりくりつとした赤い目で見つめ返してきた。

(どうして鳩?)

やっぱり意味が分からない。

それに、ロベルトの服装もだ。まるでこれから旅に出るといわんばかりの格好である。

彼は声をひそめて言う。

「実は今、セシリアお嬢様がこの領にお戻りになっているんだ」

「セシリアお嬢様？」

どこかで聞いた名前だ。籠を抱えたまま、フィオナは小首を傾げた。

「ハーシエルの妹君だよ。五年前に西の辺境スノーエイラ領に嫁がれたが、名前くらいは聞いたことがあるだろう？」

そこまで説明されて、やっと思い出した。領主のシェディールには弟のハーシエルの他に、妹のセシリアがいるのだ。とても美しい姫君だと昔から評判で、フィオナが小さい頃は人形遊びをする時、お姫様役の人形にセシリア姫と名付けるのが流行った。

「ああ、あのセシリア様ですね。ですが、セシリア様が戻られたことが、この鳩にどう関係するのですか？」

「セシリアお嬢様は、ハーシエルとあまり仲がよろしくなくてな。おそらくハーシエルが己の立場をわきまえず、一般市民と婚約したのが不満で、アイシス殿に直接ハーシエルとの婚約を取り消すよう忠告するはずだ。そして、俺の婚約者であるフィオナ殿にも」

「え？ 私にですか？」

それはロベルトがハーシエルの従者だったからだろうか。だが、貴婦人が元使用人の婚約者にわざわざ会いたがるものだろうか。

首を傾げるフィオナの目を、ロベルトがじっと見つめた。

フィオナは恥ずかしさから、頬を赤くする。

「何か問題が起きたら、この鳩に手紙を括り付けて空に放してくれ。絶対に駆け付ける」

「は、はい……」

ロベルトに真剣な顔で言われ、フィオナはぶんぶんと頭を振って何度も頷いた。

「では、俺はもう行く。しばらく森に潜伏するつもりだ」

「へ？ え？ ロベルトさんっ？」

潜伏という言葉に慌てて理由を聞こうとした時には、彼はすでに立ち去っていた。その足の速さに驚き、フィオナは嘩然とする。

「いったいどういうことなんだろう。そんなにセシリア様が苦手なのかしら。ねえ、あなたは何か知ってる？」

籠の中の鳩に聞いてみても、鳩はただクルルウと鳴いて、首を傾げるだけだった。

*

その日の夕方、セシリアは領主館の客室にいた。黄緑色の壁紙が貼られ、家具は白で統一された女性らしく華やかな部屋だ。

「まったく、ロベルトときたら失礼すぎますわ！ 何も全力で逃げなくてもいいじゃないの」

ハーシエルから咎められたことも面白くないが、何より五年ぶりに帰郷したというのに、生まれた時からの付き合いである自分を徹底的に避けるロベルトに腹が立つ。

セシリアはティーカップに手を伸ばし、紅茶を飲んで気分を落ち着かせようとした。だが同時にハーシエルの「ロベルトを苛めている」という台詞を思い出し、思わず言い訳のような言葉を口に

する。

「わたくし、ロベルトを苛めたことなんてありませんわ。修業です、修業！ ねえ、マリアンもそう思うでしょう？」

セシリアは、茶器を載せたカートの上には立つ侍女マリアンを見た。彼女は三つ編みにした茶色の髪を揺らして首を傾げていた。やがてセシリアの問いを理解したのか、眼鏡の奥の目を見開く。

「え、あれは苛めではなかったのですか？」

「なっ！」

そう問い返され、セシリアは絶句した。

まさか自分の乳母の娘であり、一番信頼しているマリアンにまでそう言われるとは思っていなかった。セシリアは昔から、マリアンの言うことにだけは耳を傾けるのだ。

そんなに非道な真似をしただろうかと過去を振り返ってみたが、やはり修業だったとしか思えなかった。

考え込む主人に、マリアンは落ち着いた声で説明する。

「お嬢様が修業だと思われていたことは理解していますが、さすがにナイフと弓矢だけを渡して熊を狩って来いと命令された時は、ロベルトのことが嫌いなのかと思いました。……まあ結果として、ロベルトは本当に狩って来てしまったわけではありませんが」

「何故、あの時にそう言わなかったの？」

「申し上げましたよ。あまりに危険なのでやめた方が良いでしょう。ですが、お嬢様は聞く耳をお持ちで

はありませんでした」

それは責めるような物言いでも表情でもなかったのだが、セシリアは少し反省してうなだれた。マリアンは変わらず淡々と続ける。

「まあ、ロベルトは機転が利きますから、熊を崖に追い込んで落とすという手段を思いついたようですけど。熟練の猟師ならともかく、普通は熊狩りなど一人でするものではありません。猟師として一人であれば狩猟犬を連れて行きます」

「わ、分かっていますよ。当時のわたくしが浅はかだったのです」

「そうでございますね」

マリアンは遠慮なく言った。ぐっと詰まるセシリアに、更に畳み掛ける。

「あんまり可哀想でしたので、私はロベルトの逃亡を何度か手助けいたしました。そのことはお詫びいたします」

「そうでしたの？」

「はい。だってお嬢様、ロベルトはただでさえ無愛想な子どもでしたのに、どんどん無表情になっていくんですよ？ しかもセシリアお嬢様のお名前を聞くだけで、青くなって逃げ出す始末。幼馴染としては、とても見えていられず……」

眼鏡を外し、そっと涙を拭うマリアン。

ちくちくと責められて、セシリアは気まづくなった。

セシリアにとってマリアンは、ハーシェルにとってのロベルトのような存在だ。セシリアの遊び

相手として領主館で育った彼女は、使用人仲間のロベルトとも親しくしていた。だからロベルトをこっそり庇っていたと聞いても、何も不思議ではない。

マリアンも悪気があつてしたわけではないのだし、今更そんな昔のことをつつく気もなく、セシリアはただ諦めたように溜息を吐いて言った。

「今更、咎めはしませんわ。とにかくロベルトを捕まえ次第、連行するよう騎士達に言いつけていますから、彼が戻ってきたらこちらに通しなさい」

「お嬢様、そのように強引なことをなさるから、ロベルトが逃げるのです。彼に限らず、殿方というのは追えば追うほど逃げたくなるものだと思いますよ」

「仕方ないじゃないの。スノーエイラへ帰るまで、日にちがありませんもの」

「……窮鼠猫を囓むということわざをご存知ですか？」

「マリアン、お小言はもういいわ。ロベルトが騎士達を返り討ちにすることを心配しているのなら、それはないでしょう。そんなことをしたら我が領とのいざこざに発展しかねませんもの」

したたかな打算を口にするセシリア。

マリアンは諦めたように首を振り、溜息を吐く。

その時、コンコンと扉がノックされた。

「セシリー、私だ。少し話があるのだが」

「シエディールお兄様？ どうぞ、お入りになって」

予定外の訪問だったが、セシリアは気にせず部屋に招いた。

「失礼するよ」と断つてから客室へ入ったシェディールは、セシリアの向かいの長椅子に座る。マリアンは手早く紅茶を淹れ、彼の前にカップを置いた。

「どうしましたの、お兄様。今日は晚餐でお会いする予定でしたでしょう？」

話があるならその席であればいいのと言いたげなセシリアに、シェディールは苦笑した。

「いや、君が彼女と会う前に、忠告しておこうと思つてね」

「彼女？」

シェディールは長椅子の背にゆつたりともたれ、長い足を組む。

「そう。昨日ハーシエルの婚約の話をしただらう？」

「ええ」

セシリアは頷いた。

「例のアイシス嬢が、ハーシエルの正式な婚約者になったのでね、彼女には屋敷に行儀見習いに来てもらうことになったんだよ。週に三日、妻のヨランダと侍女頭が指導している。実は、今日も来ているんだ」

「まあ」

セシリアは青い目を煌めかせた。

「それは、是非お会いしたいですわ」

「そう言うと思つたから、ここに来たんだよ」

シェディールの話は回りくどくて要領を得ない。セシリアは柳眉をひそめた。

「何をおっしゃりたいんですの、お兄様」

「簡単なことだよ。アイシス嬢に一人で会つたり、呼び出したりするのはやめておきなさい。彼女は平民で、君は貴族。ただでさえ平民は萎縮してしまうのに、婚約に反対してる君が一人で行つたら、脅しているのと変わりがない」

「それで「忠告」ですか」

シェディールは真面目な顔で、大きく頷いた。

「どうやら、彼はハーシエルの味方ようだ。」

「もしアイシス嬢に会いたいなら、ヨランダかハーシエルを通すように。君は不服だろうが、ハーシエルに関わることは、この領の問題でもある。ハーシエルは次男とはいえ、私に何かあつたら領主家を継ぐことになるのだからね。君から見れば、浮わつて頼りない兄なのだろうけど、ハーシエルはハーシエルで苦労しているんだ。最愛の人と結婚したいというなら、それくらいの望みは叶えてあげようではないか」

「……わたくしはあくまで反対ですが、お兄様のおっしゃりたいことは分かりました」

ハーシエルの婚約が彼だけの問題にとどまらないことはセシリアも理解している。

だがセシリアには、ハーシエルが次男坊の立場を気楽なものにとらえ、恋愛にうつつをぬかしているようにしか見えなかった。その割に学業も武芸もそつなくこなす器用さがある。それがセシリアには昔から悔しくてたまらない。自分が男に生まれていれば、もつと家のために働くのに。

しかしそれは叶わない話だし、今は他家に嫁いだ身だ。たとえ故郷のことだろうと、よその領地

の問題に口を突っ込むべきではない。

(まあ、それでもハーシエルお兄様の婚約には反対ですし、婚約者に会わせてもらいますけど)

あのハーシエルが婚約を望んだアイシス・トレーズとはいったいどんな娘なのだろうと、セシリアは単純に興味があるのだ。

「お兄様の言い付けは守りますわ。アイシス嬢にお会いする時は、ヨランダ様を通すことにいたします」

「ああ、是非そうしてくれ」

シエディールは満足げに頷くと、お茶を一口飲んでから席を立った。

「では、また晩餐の時に」

「ええ」

「その時は楽しい話をしよう」

「そうですわね」

シエディールは、久々の兄妹の再会の場を心から楽しみたいのだろう。退室していく兄を見送りながら、セシリアは口元に笑みを浮かべた。

扉が閉まると、彼女はマリアンを振り返る。

「さてと。マリアン、アイシス・トレーズのごで相談したいと、ヨランダ様にお伝えしてきてちょうだい」

「承知いたしました、セシリアお嬢様」

マリアンは返事をするや否や、すぐに部屋を出て行った。

「ヨランダ様、お時間をいただきありがとうございます」

その日の夜遅く、ヨランダの部屋を訪ねたセシリアは、優雅にお辞儀して礼を言った。

テーブルの横に立っていたヨランダもお辞儀を返す。

「いいえ、セシリア様。むしろこんなに遅い時間になってしまつて申し訳ありません」

燃えるような赤色の髪をゆったりと結び上げ、紺色の室内用ドレスに身を包んだヨランダは、申し訳なさそうに眉尻を下げている。

彼女は凛とした空気を持つ美しい女性だ。故郷のリューエン領では地竜と呼ばれる大きなトカゲを乗りこなし、セシリアほどではないが武術もたしなんでいたそうだ。そんなヨランダにセシリアは親近感を抱いている。

「急でしたから、仕方ありませんわ。明日でもよろしかったのに、こちらこそお氣遣いをさせて申し訳ありません」

セシリアがそう返すと、ヨランダは淡く微笑んだ。そして、セシリアをテーブルへ案内した。

二人がテーブルに着いたのを見計らつて、ヨランダ付きの侍女がお茶を淹れた。軽くつまめる砂糖菓子も並べられる。

セシリアは紅茶を一口味わうと、さっそく本題に入った。

「ヨランダ様、お伝えしていました通り、アイシス・トレーズの件でお話がありますの」

「はい」

「わたくしは、お兄様の婚約者がどんな方か見極めたのです。そこで、彼女に面会する時にヨランダ様にも同席していただきたいんです。お願い出来ますかしら？」

単刀直入に問いかけるセシリアに、ヨランダは頷いた。
「ええ、もちろんよろしくてよ」

セシリアは「おや？」と思った。てっきり反対されるものと思っていたのだ。
その気持ちを読み取ってか、ヨランダは苦笑する。

「セシリア様、あなたはわたくしより年上ですが、わたくしにとっては義妹にあたりますわ。そしてアイシスも将来、そうなるでしょう。わたくしは、あなた方二人の間に溝を作るべきではないと考えています。一度、会った方がお互いのためでしょう」

「ご配慮いただき、ありがとうございます」

「いいえ。——ところで、お茶会の形式にしても構いませんか？」

「ええ、構いませんわ」

「良かった。せっかいですから、アイシスの礼儀作法をテストしようかと思ひまして」

そう言うてにこにこ微笑むヨランダ。

楽しそうなその笑顔を眺めながら、セシリアは胸中で苦笑した。

(シエディールお兄様の奥様も、容赦ない方ですのね……)

思えばセシリア達の両親もまた、容赦がなかった。領主家名物の地獄のマナー講座を思い出し、

セシリアは遠い目をする。特に母は行儀作法にうるさく、小さい頃は気が強いセシリアもよく泣き言を言っていたものだ。

「それは面白いですね。わたくしも見て差し上げますわ」

そして、二人の貴婦人は笑みを交わした。

*

お茶会当日。セシリアとヨランダとアイシスの三人は、領主館の庭の外れにある、ガラス張りの温室にいた。

木枯らしの吹く季節にもかかわらず、温室には緑が生い茂っており、黄色や赤の小さな花がぼつぼつと咲いている。そして、うらかな日差しがガラスの天井から差し込み、テーブルの上にある花瓶や茶器、菓子をキラキラと照らしていた。小さなケーキなどの繊細な細工の施されたお菓子は宝石のようで、見るからにおいしそうだ。

セシリアは本日のゲストであるアイシスを観察して、胸中で溜息を吐いた。

アイシス・トレーズは、明るい金髪と鮮やかな緑色の目を持つ、実に可憐な少女であった。加えてウォルトホル領内では有名な布地商であるトレーズ商会の看板娘として、人懐っこくて明るいという評判だという。

初対面であるセシリアから見ても、アイシスはいかにも人当たりが良さそうだ。ヨランダが可愛

がつているのもよく分かる。兄の婚約者でなければ、自分の侍女にしたいくらいだった。

三人はしばし会話を楽しんでたが、やがてセシリアが本題を切り出す。

「礼儀作法については、まあ合格といたしましょう。ですが、それとは別問題ですのではっきり言います。わたくしは、ハーシエルお兄様とあなたの結婚には反対ですわ」

セシリアがそうきつぱり言うのと、向かいに座るアイシスの顔が若干引きつった。だが彼女はすぐには笑みを浮かべ、若干吊り目がちな明るい緑色の瞳でセシリアを見すえる。

「それは、私が平民だからでしょうか？」

アイシスは大人しいと噂の姉フィオナと違い、物怖じしない性格をしているようだ。

「ええ」

セシリアは肯定し、身分違いの恋が悲劇しか生まないことを説いて聞かせた。

「——そういうわけで、お兄様とは別れることをおすすすめしますわ。あなたは容姿が良いのですから、引く手あまたでしょう？ きつと、あなたを幸せにしてくれる殿方が他にいるはずすわ」

セシリアはティーカップを傾けながら、ちらりとアイシスの様子を窺った。まだ十六歳であるアイシスは、ムキになって否定するか、暗い未来を想像して落ち込むかのどちらかだろうと思つたが、彼女はただ困つたようにやんわりと微笑んでいる。

「セシリア様は、一つ思い違いをなさっています」

「……何がです？」

意外な反応に、セシリアは興味をそそられた。

「私は、男の人に幸せにしてもらおうとは考えていません。一緒に幸せになれるように頑張りたいんです。ですから、ハーシエル様ともそうしていきたくと思っています」

「それで、幸せになれなかつたらどうしますの？」

「頑張つて頑張つて、更に頑張つても駄目だった時は諦めます。ですけど私、する前から駄目だった時のことを考えるのは好きではありません。悪い結果を引き寄せてしまいますから」

「……ますます不安になりましたわ」

セシリアはアイシスの前向きさに呆れつつも、同時に清々しく感じ、やはりあんな兄にはもつたいないと思つた。そんなアイシスの幸せのためにも、ここは心を鬼にして二人を引き離そうと決意を新たにする。

そして、ハーシエルの悪いところを挙げていけば、幻滅してくれるかもしれないと考えた。

「あなたをご存知ないかもしれませんが、兄は女癖が大変悪いのですよ」

「はい、そのお噂は聞いております。でも、今はそうではありません」

セシリアの言葉に、アイシスはきつぱりと返す。そして、アイシスとハーシエルが結婚を前提に付き合うきつかけとなった事件について、セシリアに説明した。

アイシスがハーシエルの浮気を疑い、道端で桶に入っていた水をかけて振つたこと。それが実は浮気でなく、その時メリーハドソンで起きていた殺人事件の情報収集をしていただけだったこと。その後ハーシエルから謝罪と同時にプロポーズされたこと。それら全てをアイシスは語つた。

それを聞いたセシリアは、あの兄が道端で桶の水をかけられたのを想像して思わず嘔き出してし

まった。

一方、ヨランダは驚きの目でアイシスを見ている。

ますますアイシスを気に入ったセシリアだったが、彼女のことを思えばなおさら婚約には反対だ。他にハーシエルの悪いところはないかと思考を巡らせる。

だがハーシエルの欠点といえば、浮気性などところぐらいだ。容姿は良いし、服や贈り物のセンスも良い。裕福だが両親に厳しく育てられたのでお金の遣い方も堅実だし、女性に暴力を振るうことも当然ない。だいたい何でもそつなくこなしてしまいうし、人当たりが良いから誰にでも好かれる。少し考えて、セシリアは一つの欠点を無理矢理ひねり出し、口にしてみた。

「お兄様は、ロベルトより弱いすわよ？」

「大丈夫です、セシリア様。少し弱いくらいで幻滅なんてしません。むしろ、私がハーシエル様をお守りします！」

アイシスは右の拳をぐつと握り締め、気合十分に宣言した。

（この娘、本当にお兄様が大好きですね……）

まっすぐに気持ちを表現するアイシスに更に好感を持ったが、それではいけない。どうか説得しなくてはと考える。

無言のままアイシスを見つめるセシリアを、アイシスも負けじと見つめ返す。しばし睨み合いのような状態になっていたが、やがてヨランダが口を挟んだ。

「まあまあ、お二人とも、そこまでになさっては？ せっかくのお茶会です。もっと楽しいお話を

しましょう。……そうかわ！」

ヨランダは強引に話題を変えようと、ぼちつと両手を合わせた。

「セシリア様、アイシスの姉が、ロベルトの婚約者なんですよ。ね、アイシス」

ヨランダが笑顔で問いかけると、アイシスは首肯した。

「ええ、ヨランダ様」

「そういえば、あなたの姉がロベルトの婚約者だというのを忘れていたわ。いったい、あの無愛想な男が射止めた女性はどんな方なのかしら？ 興味があるわ。ねえ、アイシス・トレース。今度、あなたのお姉様も交えてお茶会をしませんこと？」

遠回しに連れて来いと言われて、アイシスは少し顔をしかめた。ハーシエルの悪口を言われても表情を崩さなかったのに、姉のことになると冷静ではいられないらしい。

しかしヨランダがゴホンと咳払いすると、アイシスは我に返ったように笑みを浮かべた。

「わたくしも興味があるのよ、アイシス。ねえ、招待しても構わない？」

ヨランダからも頼まれて、アイシスは渋々といった様子で頷く。

「分かりました。話してみますが……姉は体が弱いので、お約束はいたしかねます」

だが結局、そんな風にあいまいに返事をするだけだった。

*